



改訂版

# 仙台真田 SENDAI SANADA 物語



# 仙台真田物語

— せんだいさなだものがたり —

其の一	六文銭の戦国大名 真田昌幸	3
其の二	犬伏の別れ	4
其の三	上田合戦	5
其の四	九度山の日々	6
其の五	大坂冬の陣	7
其の六	東の間の和平	8
其の七	日本一の兵々大坂夏の陣	9
其の八	大八、伊達家に匿われる	10
其の九	阿梅ら、白石での暮らし	11
其の十	戦国の秘大作戦!	12
其の十一	守信、伊達家の武士になる!	13
其の十二	真田から片倉に...	14
其の十三	蔵王町に根付いた幸村の血脈	15
其の十四	父の菩提を弔う	16
其の十五	再会、兄弟の血脈	17
其の十六	真田復姓なる!	18

## はじめに

みなさんは『真田氏』という一族をご存知でしょうか？

真田氏は、現在の長野県上田市真田町（信濃国真田庄）に発祥した武士の一族です。知略・軍略に優れた者が多く、戦国時代後期の当主・幸隆とその子昌幸は、智謀を尽くして真田氏を小豪族から大名にまで発展させました。また、関ヶ原の合戦での昌幸の活躍、大坂の陣での昌幸の子幸村の奮闘、徳川幕府に深く溶け込み家名を守った幸村の兄・信幸の業績など、真田氏の歴史には、人々が心を動かす物語がたくさん散りばめられています。実は、そんな真田氏と私たちの郷土とは深いゆかりがあるのです。

この物語は、蔵王町矢附・曲竹地区に根付いた真田幸村の末裔『仙台真田氏』の歴史秘話をわかりやすく紹介するものです。史実に基づいて制作していますが、一部、物語を盛り上げるために脚色した部分もあります。そうした部分は各ページに注意書きをしていますのでご了承ください。

たくさんの方々はこの魅力的な郷土の歴史を知っていただき、地域を思いつ心を育んでいただければ幸いです。

## 制作・発行

蔵王町教育委員会 〒989-0892

宮城県刈田郡蔵王町大字田田字西浦北10

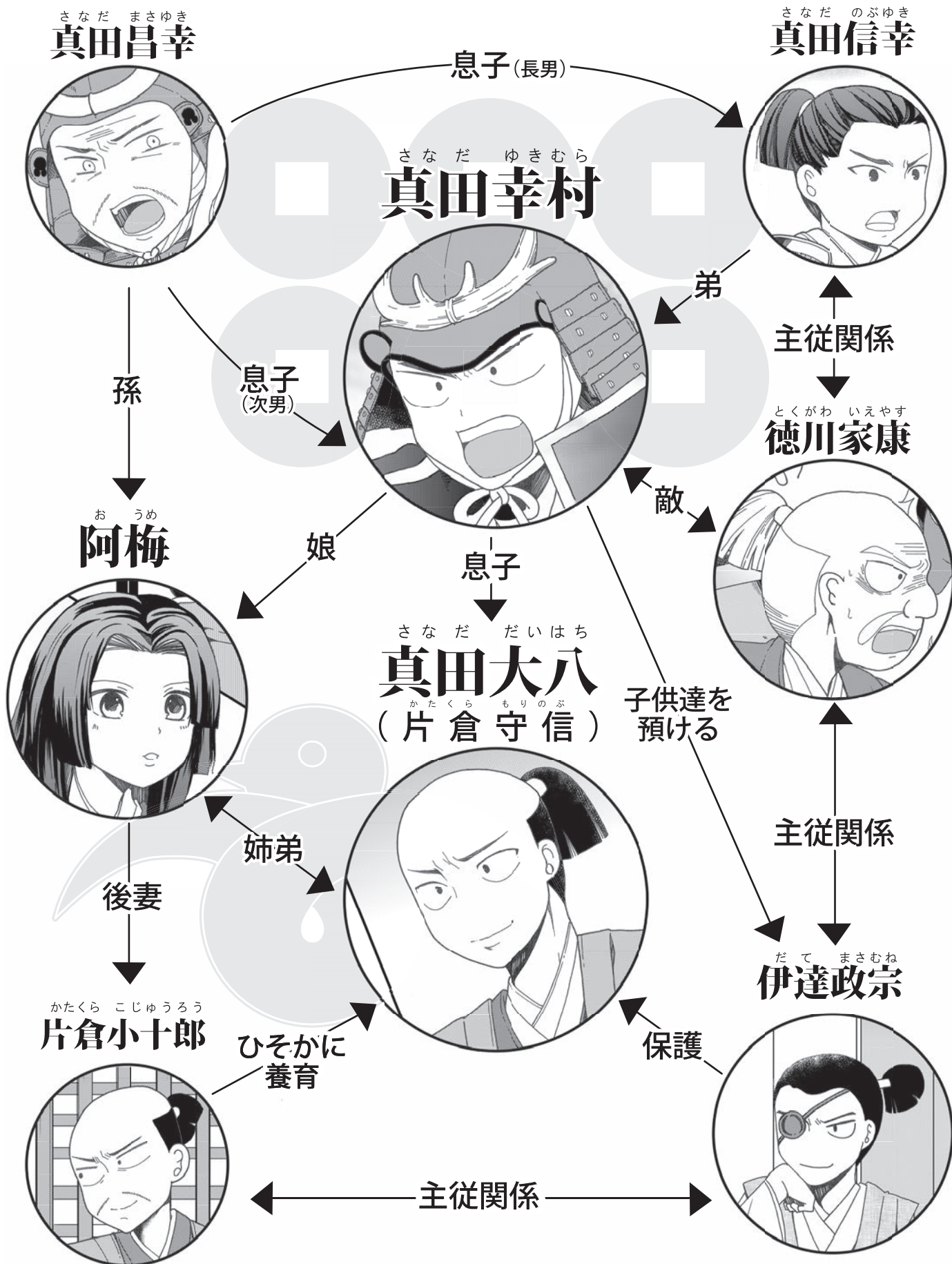
TEL: 0224-33-3008 FAX: 0224-33-3831

ホームページ: <http://www.dokitan.com/>



とうじょう じんぶつ しょうかい

# 登場人物紹介



しなのくにせいりよく  
信濃国勢力図



うえすぎかげかつ  
上杉景勝



さなたまさゆき  
真田昌幸

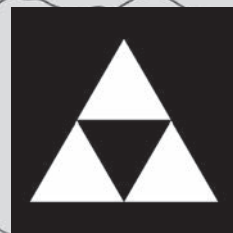
上田城



はしばひでよし  
羽柴秀吉



とくがわいえやす  
徳川家康



ほうじょうじなお  
北条氏直

その一

ろくもんせん  
六文銭の戦国大名、真田昌幸

せんごく  
時は戦国、  
しんしゅううえだじょう  
処は信州上田城。  
さなたまさゆき  
真田昌幸は困り果て  
ていました。

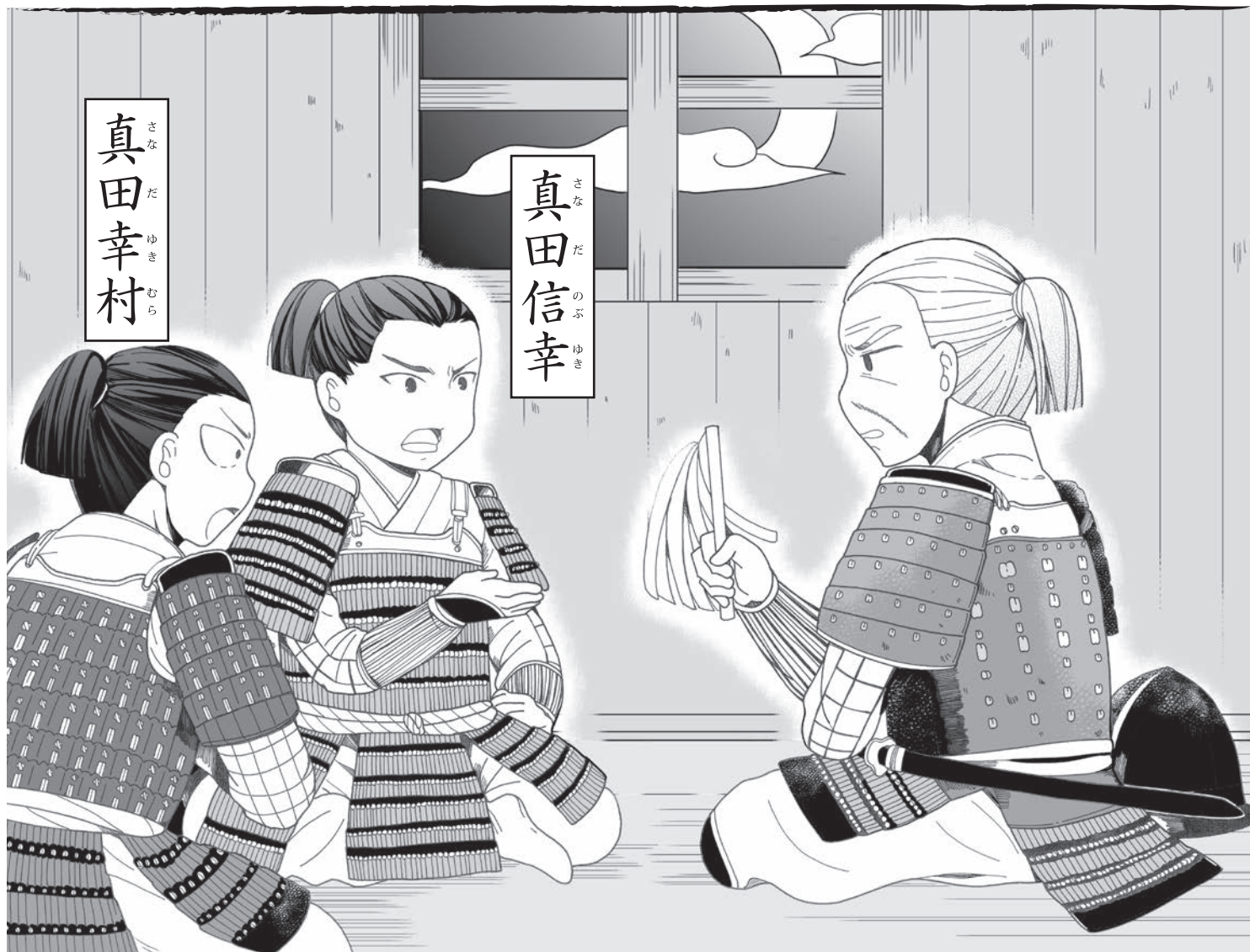
なぜかと言えば、  
まさゆき  
昌幸の主君、  
たけだけ  
武田家が滅亡して  
しまったから！

せんごくだいみょう  
まわりの戦国大名たちが武田領に攻め込んできて、  
まさゆき  
昌幸の領地にまで手を伸ばそうとしていたのです。

さなたけめつぼう  
真田家滅亡の危機！

さなたかもん  
真田の家紋は、「いつ戦死しても、あの世に行く  
用意はできている」という心意気を表す『六文銭』。  
でも、この状況でむやみに戦いを挑んだとしても、  
とても勝ち目はありません。

まさゆき  
そこで昌幸は、わずか数年の間に何度も主君をく  
ら替えして、どうにか領地を守り通すことができた  
のです。



其の二

犬伏の別れ

慶長5年（1600）のこと。天下人・豊臣秀吉が

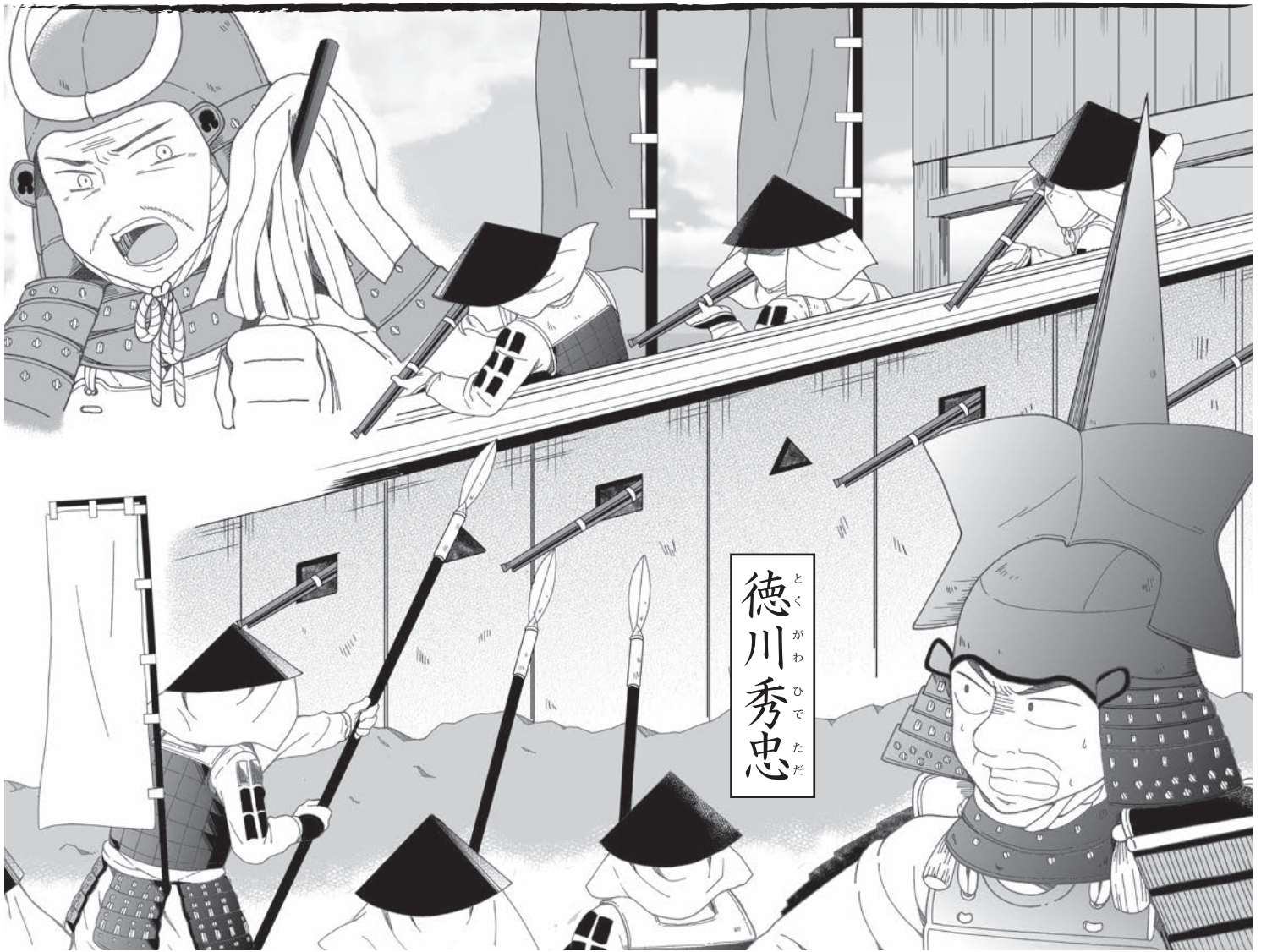
亡くなった後、力を強めてきた徳川家康と、それに  
 対抗する豊臣方の武將たちが大激突！『天下分  
 け目』と言われた関ヶ原の合戦です。

真田家は徳川方でしたが、豊臣方から誘いを受け  
 た昌幸は、下野国犬伏宿に長男信幸と次男幸村を呼  
 び寄せて、秘密の話し合いをしました。

今回のような天下を二つに分けての大合戦のとき  
 は、どちらが勝っても真田の家が残るようにしなけ  
 ればなりません。

昌幸は、徳川とゆかりが深い信幸は徳川方に残し、  
 豊臣とゆかりが深い自分と幸村は豊臣方に付くこと  
 にしたのです。

一族をふたつに割ってでも真田の家を残す…。  
 これが昌幸が出した答えでした。



其の三

## 上田合戦

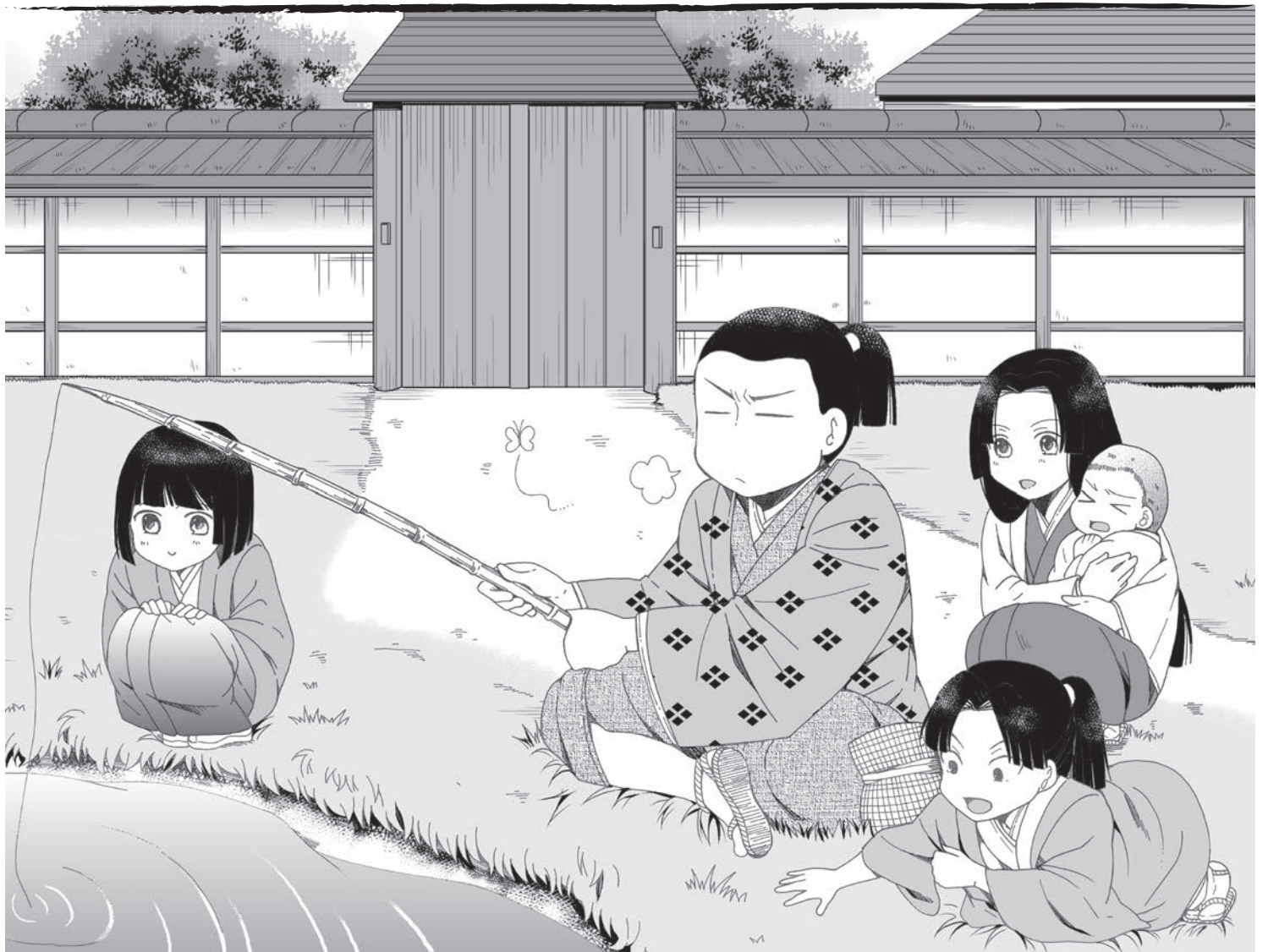
犬伏宿での話し合いの後、昌幸と幸村は上田城に立てこもりました。

一方信幸は、父と弟の寝返りを徳川秀忠に報告します。怒った秀忠は、三万八千の軍勢で上田城を攻めることにしました。

対する真田方の軍勢は三千。簡単に攻め落とせると考えていました。しかし、秀忠の考えはあつと言う間に打ち砕かれてしまいました。

昌幸は、おとりを使って徳川の兵を誘い出し、その側面を幸村の騎馬隊に攻撃させました。徳川勢は大混乱！

さらに水攻めで兵を溺れさせ、それを切り抜けて上田城にたどり着いた兵には、城から無数の鉄砲を浴びせかけたのです。秀忠は、戦上手の昌幸の作戦にひっかかって大敗北を喫したのです。



其の四

九度山の日々

上田城で徳川方に勝利をおさめた昌幸でしたが、肝心の関ヶ原の合戦はわずか一日で終結。徳川方の勝ちで決着してしまいました。昌幸と幸村は敗軍の将となってしまったのです。

昌幸に敗北した秀忠は昌幸を処刑すると言い張りましたが、徳川方についた信幸の必死の助命嘆願に心打たれた家康が、命だけは助けて流罪にすると決めました。昌幸は妻を信幸の元に残して、また幸村は家族を伴って、わずかな家臣とともに紀州九度山の地へと流されたのです。

野山を散策したり、魚釣りをしたり、囲碁を指したり…。九度山での生活は退屈でした。やがて昌幸は上田に帰ることなく死去。幸村には、長男大助や阿梅をはじめ何人もの子が生まれました。



徳川家康

## 其の五

おおさかからゆ

## 大坂冬の陣

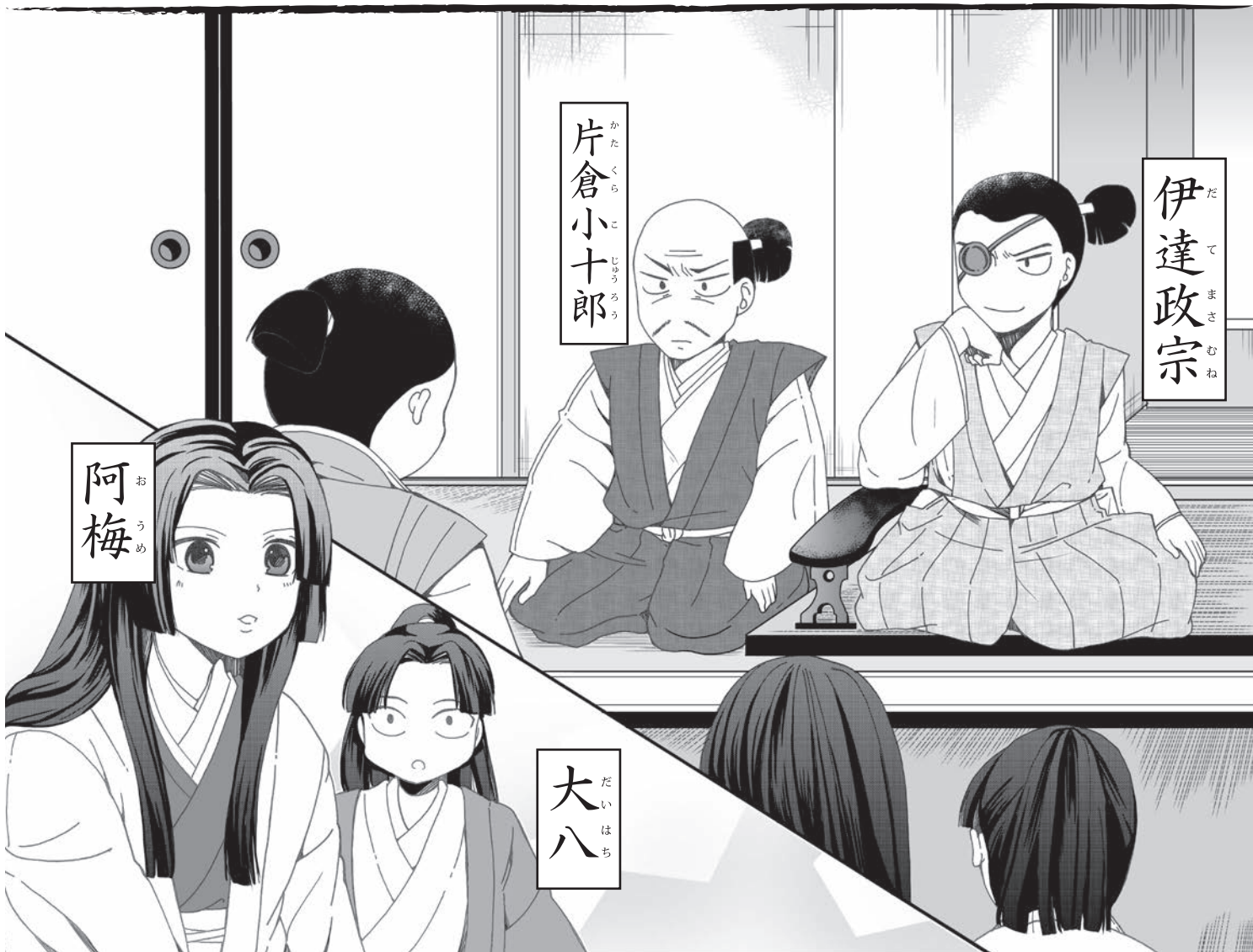
九度山での暮らしも14年目のある日、幸村の元に豊臣の使者が訪れます。

話によると、徳川の横暴な振る舞いに耐えかねて決戦を挑むとのこと。幸村は、豊臣方の将として戦うことを決め、長男大助とともにひそかに九度山を脱出しました。

大坂城に入った幸村は、徳川家康の首を取れば勝てると考えて、忍者を放って情報を集めました。すると、ある晩、家康がわずかな兵しか連れずに駕籠で出かけるという情報をキャッチ。大チャンス！幸村は、さび色の甲冑を身にまとい、兵を引き連れて家康を待ち伏せしました。しかし、あと一歩で家康を取り逃がしてしまいました。

また、幸村は、大坂城の外れに『真田丸』という出丸を築き、徳川の軍勢から城を守りました。幸村の活躍ぶりを見た家康は、10万石の大名に取り立てると言って幸村を誘いましたが、幸村は断り、豊臣方の将として戦い続けました。





其の六

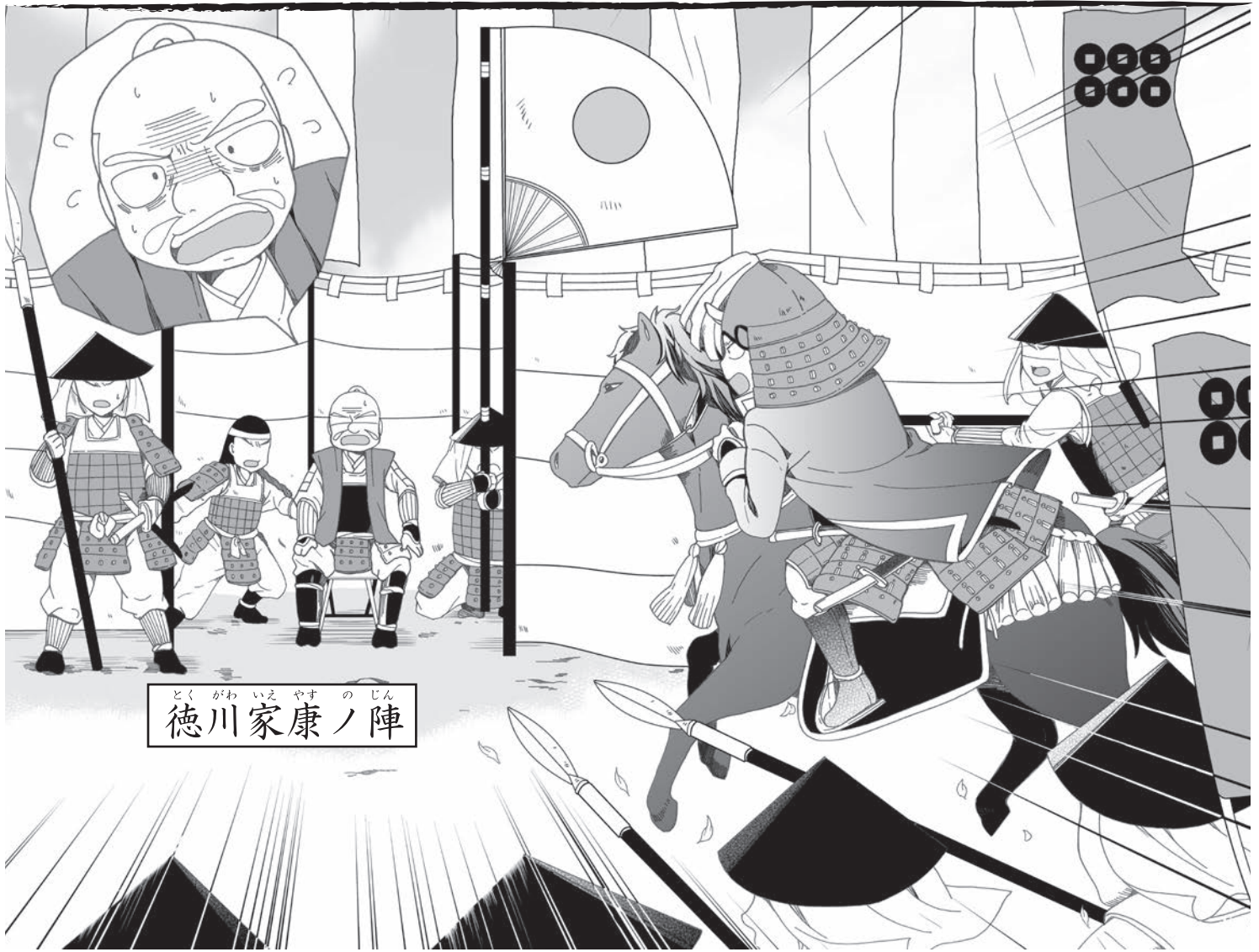
東の間の和平

大坂城をめぐる戦は、家康の申し出で講和となりました。しかし、いつまた戦が始まるかわかりません。誰もが東の間の和平とわかっていました。

幸村は、和平の間にひとつの策を講じました。それは、万一大坂方が負けたとき、自分の子どもたちを託す相手を得ることでした。もちろん大坂方の者には託せません。なんと幸村は、徳川方である伊達政宗を頼ったのです！ 政宗は、徳川家にも対抗できる力を持つ大名で、家康からも一目置かれる実力者でした。

「大坂落城の折は、我が主幸村の子息大八君と姫君数名をお預かりの上、時を見て真田の名を世に出すお力添え、お願い申し上げます。」幸村の使いの話聞いた政宗はニヤリと笑いながら、「幸村殿の願い、ようわかった。遠慮なく頼ってこられよ。」と答え、腹心の片倉小十郎重綱に全権を任せただけでした。

※このエピソードは史実にありません。物語の進行上創作したものです。



徳川家康ノ陣

## 其の七

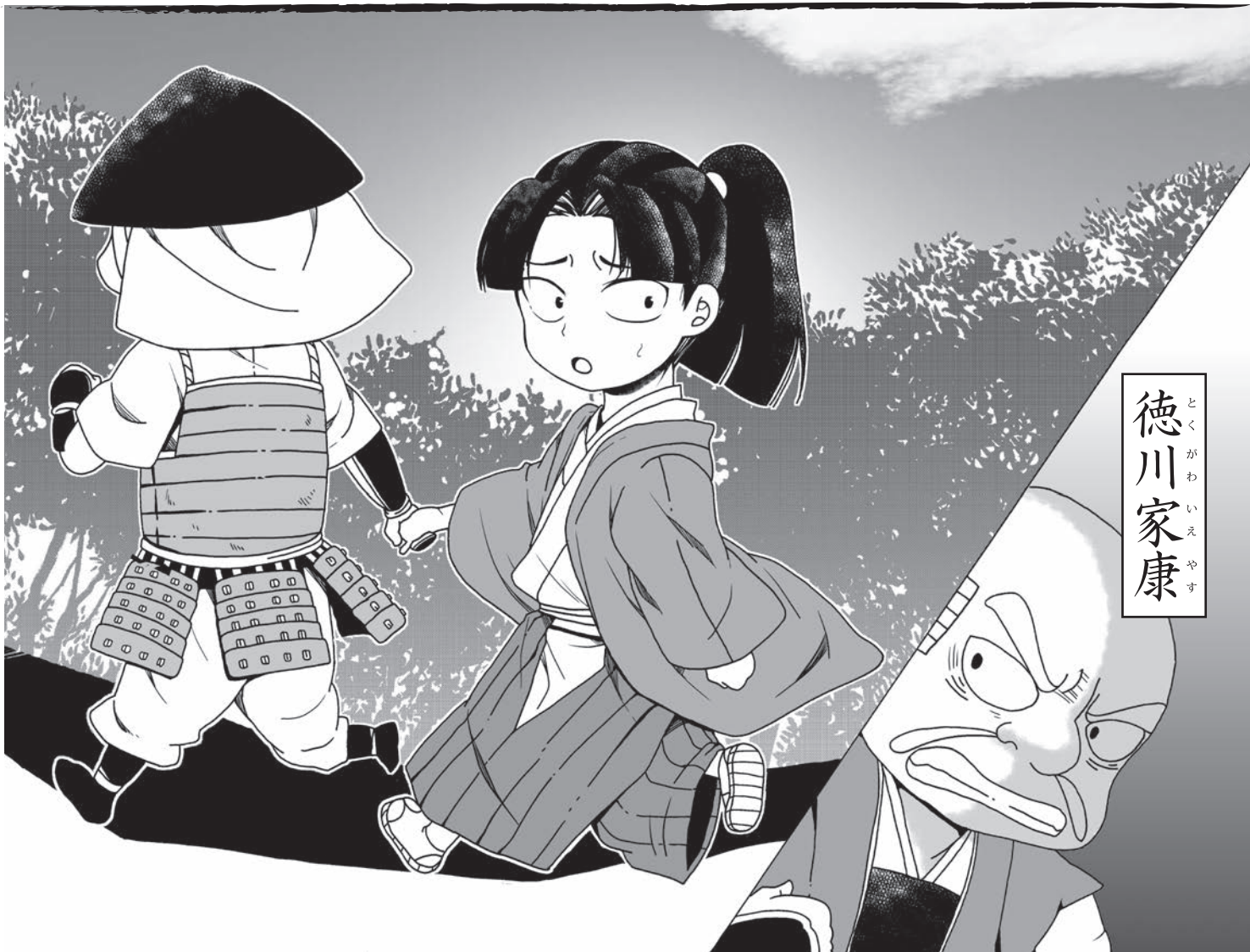
### 日本一の兵々大坂夏の陣々

和<sup>わへい</sup>平<sup>へい</sup>は、やはり半年ほどで崩<sup>くず</sup>れ去りました。和<sup>わへい</sup>平<sup>へい</sup>の条<sup>じょう</sup>件<sup>けん</sup>として大<sup>おお</sup>坂<sup>さか</sup>城<sup>じょう</sup>の堀<sup>ほり</sup>を埋<sup>う</sup>め立<sup>た</sup>てさせた家<sup>いえ</sup>康<sup>やす</sup>が、再<sup>また</sup>び戦<sup>いくさ</sup>いをしかけてきたのです。堀<sup>ほり</sup>をなくした大<sup>おお</sup>坂<sup>さか</sup>城<sup>じょう</sup>では徳<sup>とく</sup>川<sup>がわ</sup>方<sup>かた</sup>に対<sup>たい</sup>抗<sup>こう</sup>できません。幸<sup>ゆき</sup>村<sup>むら</sup>たちは野<sup>や</sup>戦<sup>せん</sup>をしかけるしかありませんでした。

慶<sup>けい</sup>長<sup>ちやう</sup>20年（1615）5月7日、幸<sup>ゆき</sup>村<sup>むら</sup>たち大<sup>おお</sup>坂<sup>さか</sup>方<sup>かた</sup>は最後の合<sup>かっ</sup>戦<sup>せん</sup>に打<sup>う</sup>って出<sup>で</sup>ました。目<sup>め</sup>標<sup>ひょう</sup>は徳<sup>とく</sup>川<sup>がわ</sup>家<sup>け</sup>康<sup>やす</sup>の首<sup>くび</sup>ただひとつ！ 幸<sup>ゆき</sup>村<sup>むら</sup>は、わずか三<sup>さん</sup>千<sup>せん</sup>五<sup>ご</sup>百<sup>ひゃく</sup>の兵<sup>へい</sup>で、一万<sup>いち</sup>五<sup>ご</sup>千<sup>せん</sup>の兵<sup>へい</sup>が守<sup>まも</sup>る家<sup>いえ</sup>康<sup>やす</sup>の本<sup>ほん</sup>陣<sup>じん</sup>に突<sup>とつ</sup>撃<sup>げき</sup>をしかけました。そのすさまじさに家<sup>いえ</sup>康<sup>やす</sup>の兵<sup>へい</sup>は大<sup>だい</sup>混<sup>こん</sup>乱<sup>らん</sup>！ 本<sup>ほん</sup>陣<sup>じん</sup>も総<sup>そう</sup>崩<sup>くず</sup>れとなり、家<sup>いえ</sup>康<sup>やす</sup>自身<sup>みづかみ</sup>、命<sup>いのち</sup>からがら三<sup>さん</sup>里<sup>り</sup>あまりも後<sup>ご</sup>退<sup>たい</sup>させられました。

家<sup>いえ</sup>康<sup>やす</sup>をあと一<sup>いっ</sup>歩<sup>ぽ</sup>まで追<sup>お</sup>いつめた幸<sup>ゆき</sup>村<sup>むら</sup>。しかし最<sup>さい</sup>後<sup>ご</sup>は疲<sup>つか</sup>れ果<sup>は</sup>て、身<sup>み</sup>動<sup>どう</sup>きすら取<sup>と</sup>れなくなっている所<sup>ところ</sup>を討<sup>う</sup>ち取<sup>と</sup>られました。人<sup>ひと</sup>々は、最<sup>さい</sup>後<sup>ご</sup>まで見<sup>ま</sup>事<sup>こと</sup>な戦<sup>たたか</sup>いぶりを見<sup>み</sup>せた幸<sup>ゆき</sup>村<sup>むら</sup>を『日<sup>ひの</sup>本<sup>もと</sup>一<sup>いつ</sup>の兵<sup>へい</sup>』と誉<sup>ほ</sup>めたたえました。

徳川家康  
とくがわ いえやす



其の八

## 大八、伊達家に匿われる

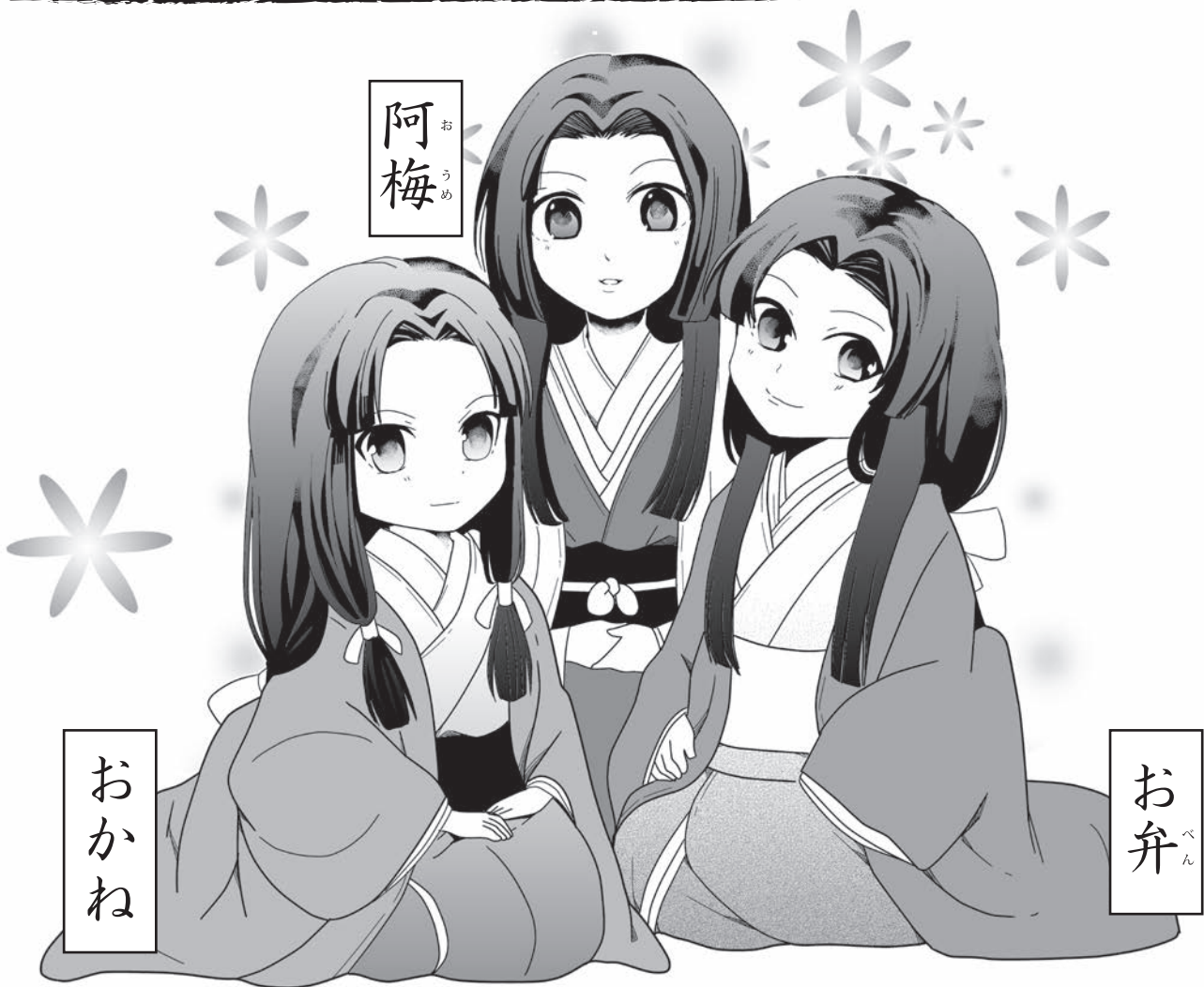
豊臣方の敗北で幕を閉じた大坂夏の陣。幸村は討ち死にし、長男大助も自害して果てました。幸村の血を受け継ぐ男子は、わずか数え4歳の次男大八ただ一人となっていました。

家康の命をおびやかした幸村は、徳川にとっては大罪人！ 決して許すことはできません。その血を受け継ぐ大八も生かしておくわけにはいきませんでした。しかし徳川方は、どうしても大八のゆくえをつかむことができませんでした。

…そうです。伊達政宗・片倉重綱は、幸村と交わした約束を忘れていなかったのです！

幸村の姫阿梅が伊達家に匿われたのは、幸村が討ち死にする前の晩のことでした。豊臣方勝利の可能性が低いことを悟った幸村が、戦の最中にもかかわらず片倉重綱の陣中へ送り届けたのです。

そして大坂落城の後、幸村方の武士、我妻佐渡と西村孫之進に守られながら、大八と残る3人の姫がひそかに政宗の元に送り届けられたのです。



其の九

阿梅ら、白石での暮らし

大八たち5人の姉弟は、政宗の軍勢の中にまぎれて無事奥州にたどり着き、片倉重綱が治める白石で暮らすこととなりました。

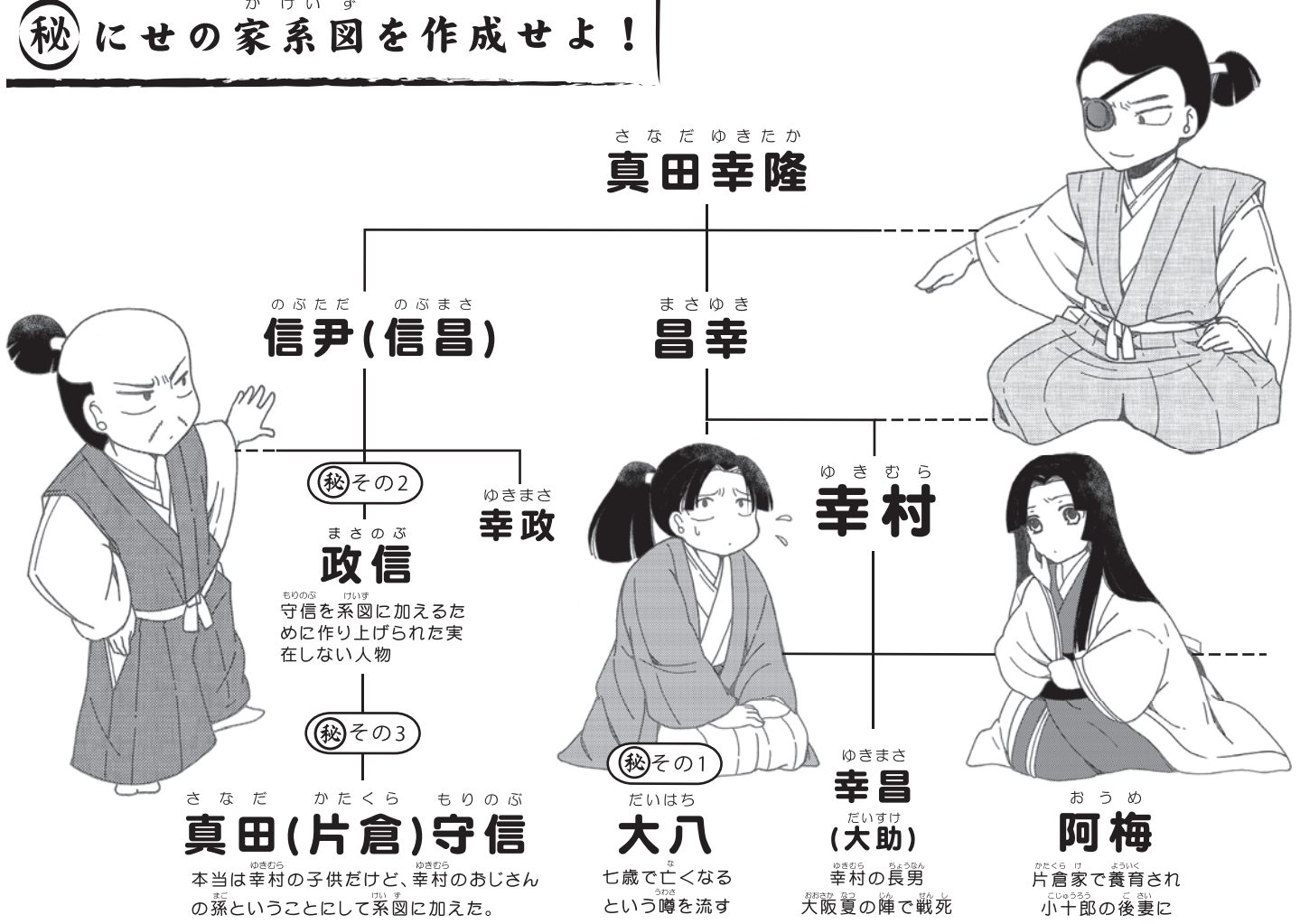
4人の姫たちは、『真田幸村公の姫君は片倉家でお預かりしている』と天下に知らせて、白石城で堂々と育てられました。

やがて、阿梅は重綱の妻となりました。

お弁は彦根の青木朝之に、おかねは京の茶人石河宗雲に嫁ぎ、それぞれ幸せに暮らしました（もう一人の姫は早世）。

しかし、姉たちとは反対に、大八が白石にいることは秘密でした。幸村の血をひく男子である大八は、徳川家に見つかれば殺されてしまうに違いありません。それに、大八をかくまった重綱や政宗も、徳川家に滅ぼされてしまうでしょう。だからこそ、大八を育てていることは絶対に秘密にしなければならなかったのです！

**秘** にせの家系図を作成せよ！



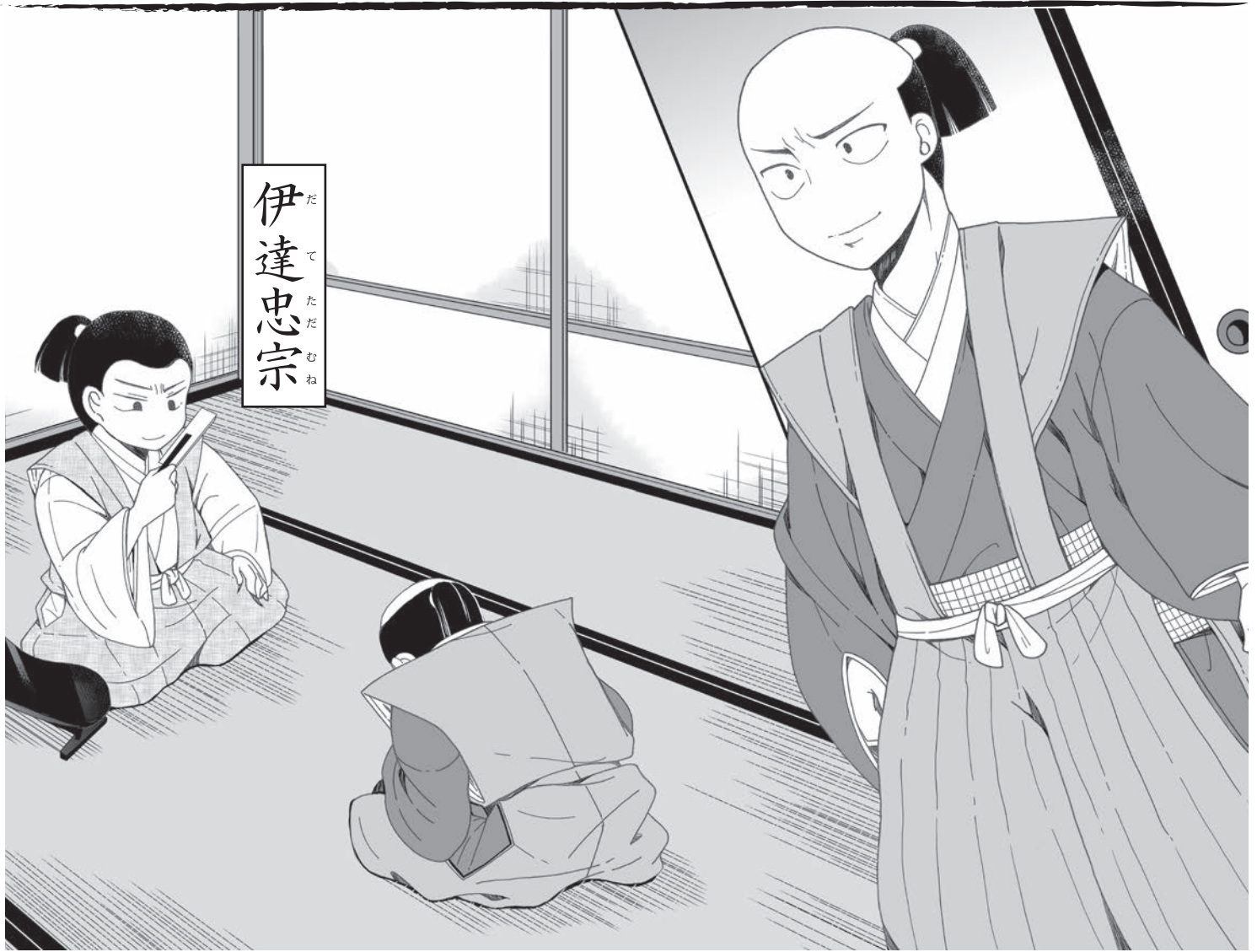
其の十

**戦国の秘 大戦略！**

大八は、『片倉久米介』と名前を変えて、白石城外で育てられました。

このころ、京都で『真田大八』は、7歳の時に京都で亡くなった」という不思議な噂が広まりました。この噂は、伊達政宗と片倉重綱が流させた『デマ情報』でした。大八が亡くなったことにすれば、片倉久米介（本当は真田大八）を育てやすくなるからです。

その後、元服した片倉久米介（本当は真田大八）は、『真田四郎兵衛守信』と名乗ります。そしてこの頃、政宗と重綱は守信のために、にせの家系図を作り上げます。その家系図には、『守信は幸村のおじさんの孫』と書かれていました。これで、守信が真田大八じゃないかと疑われても大丈夫！



其の十一

守信、伊達家の武士になる！

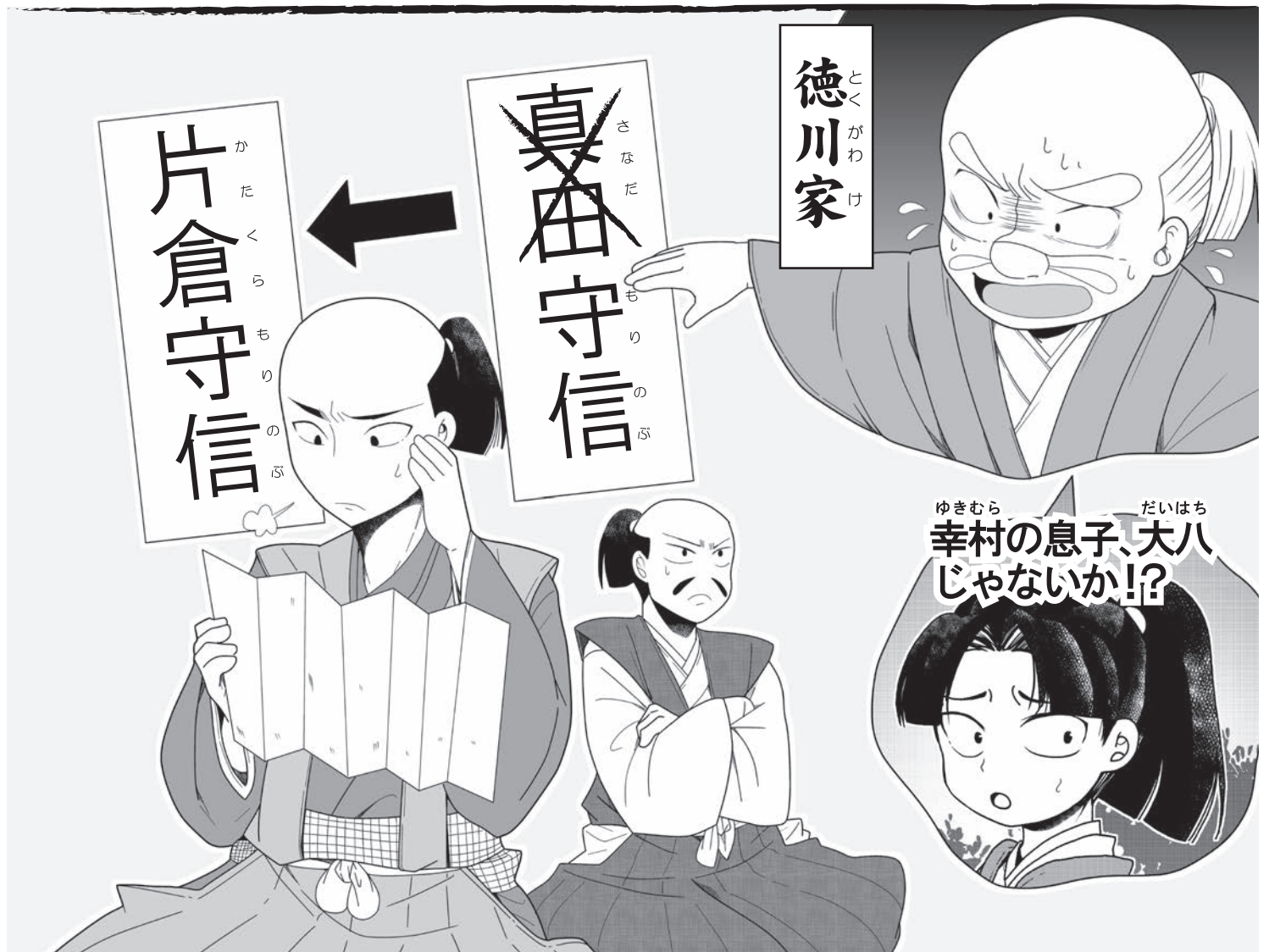
政宗と幸村が交わした約束は、『真田大八を育て、時を見て真田の姓を伝えること』でした。政宗は、徳川家のようすを伺いながら大八（真田守信）を武士として世に出すタイミングを測っていましたが、実現しないまま亡くなってしまいました。

しかし片倉重綱は、政宗亡き後もその約束を守り通し、政宗の後を継いだ2代藩主・伊達忠宗に守信を家臣にするようお願いしました。

忠宗も、幸村との約束のことは知っていました。しかし、徳川家にばれば伊達家の一大事ということもわかっています。少し考えた後、忠宗は言いました。「約束は果たさねば伊達家の名折れじゃ。そうであろう、重綱よ？」

寛永17年（1640）、真田守信はめでたく伊達家の武士として召し抱えられました。長い間途絶えていた幸村の家柄が復活したのです！

※守信の伊達家召し抱えは史実ですが、それに関する忠宗と重綱のやり取りについては物語上の演出を行なっています。



其の十二

真田から片倉に…

晴れて武士として真田の姓を名乗ることができた守信。しかし、事はそう簡単には進みませんでした。守信が召し抱えられてすぐ、徳川家から守信の家系を調べるようにと命令があったのです。

どうやら、『真田守信は、本当は幸村の息子、

真田大八なのではないか？ 徳川家の目を盗んで、

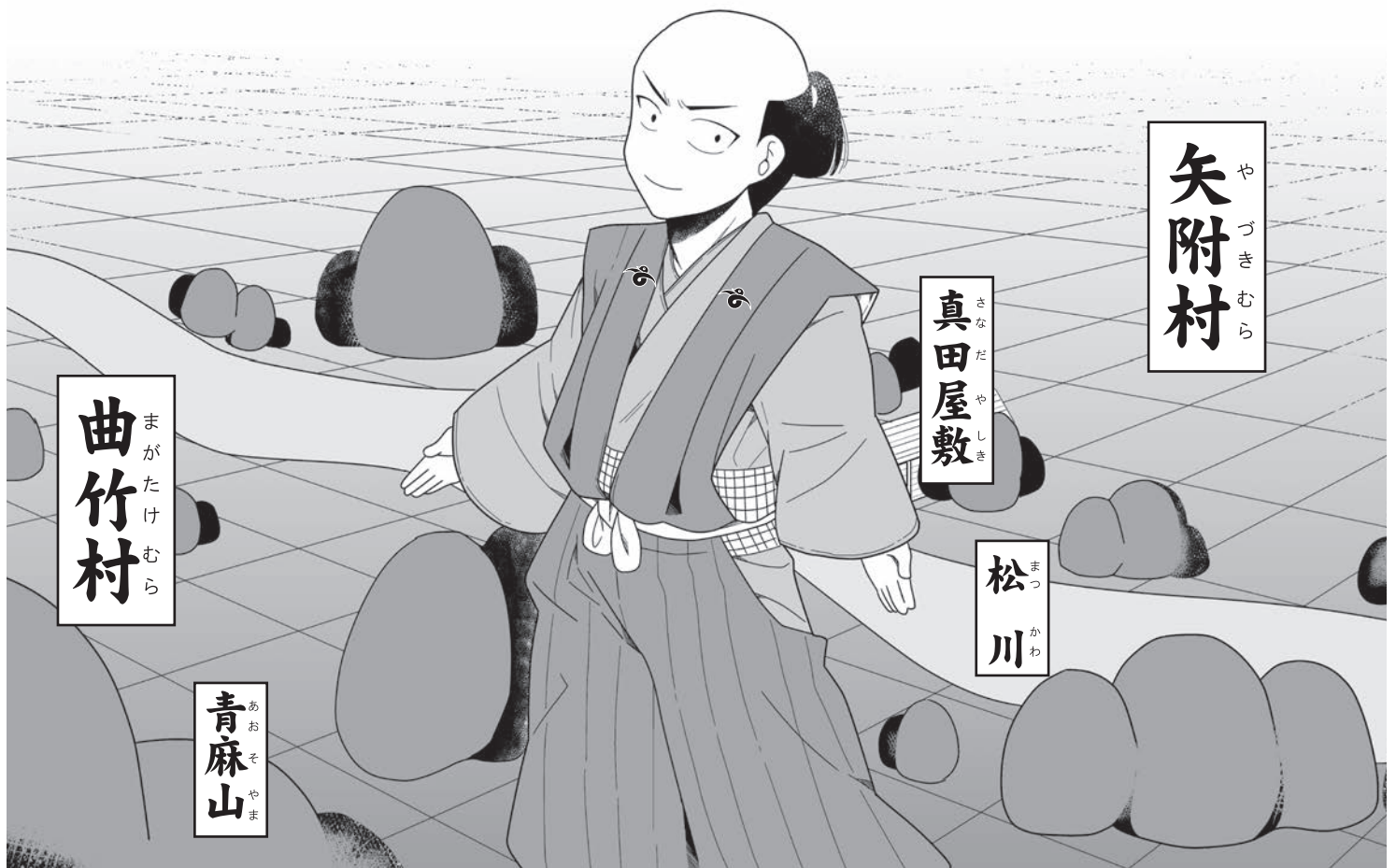
大罪人の真田幸村の家柄を復活させようとしているの

ではないか？』と、疑われてしまったようです。もっ

とも、その疑いはズバリ正解！ 徳川家もなかなか

鋭いですね！

伊達家では、以前用意していたにせの家系図を提出して追求をかわしましたが、それでもまだ徳川家の収まりはつきません。仕方なく守信は、せっかく名乗った『真田』の姓を、重綱のはからいで『片倉』に直すことになったのです。



矢附村  
やつきむら

真田屋敷  
まなだやしき

松川  
まつかわ

曲竹村  
まがたけむら

青麻山  
あおそやま

其の十三

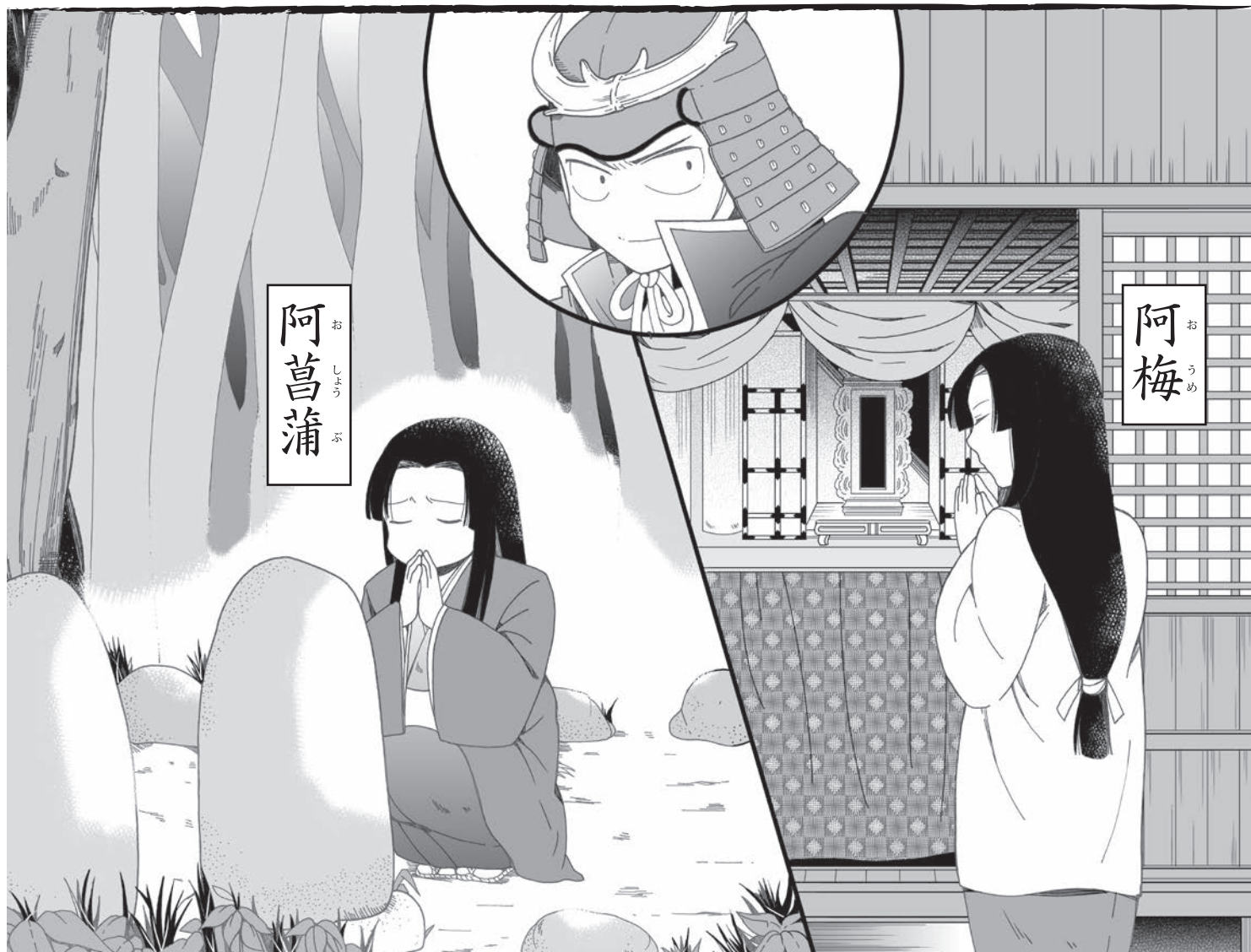
蔵王町に根付いた幸村の血脈

はじめは『蔵米取』（領地を与えられるのではなく、藩がストックしている米蔵から現物の米を支給される武士）と言って領地を与えられていなかった守信ですが、正保元年（1644）、いよいよ領地が与えられることになりました。

守信の領地は、今の蔵王町の矢附地区と曲竹地区を中心に合計三百六十石が与えられました。おそらく、守信が育てられた白石に近く、片倉重綱や阿梅たち、守信を支える人々とも行き来しやすいようにとの配慮があったのでしょう。また、矢附にはお屋敷を建てたため、蔵王町、中でも矢附は守信の領地の中心になりました。

日本一の兵、真田幸村の血脈と蔵王町とのゆかりはここから始まったのです。





其の十四

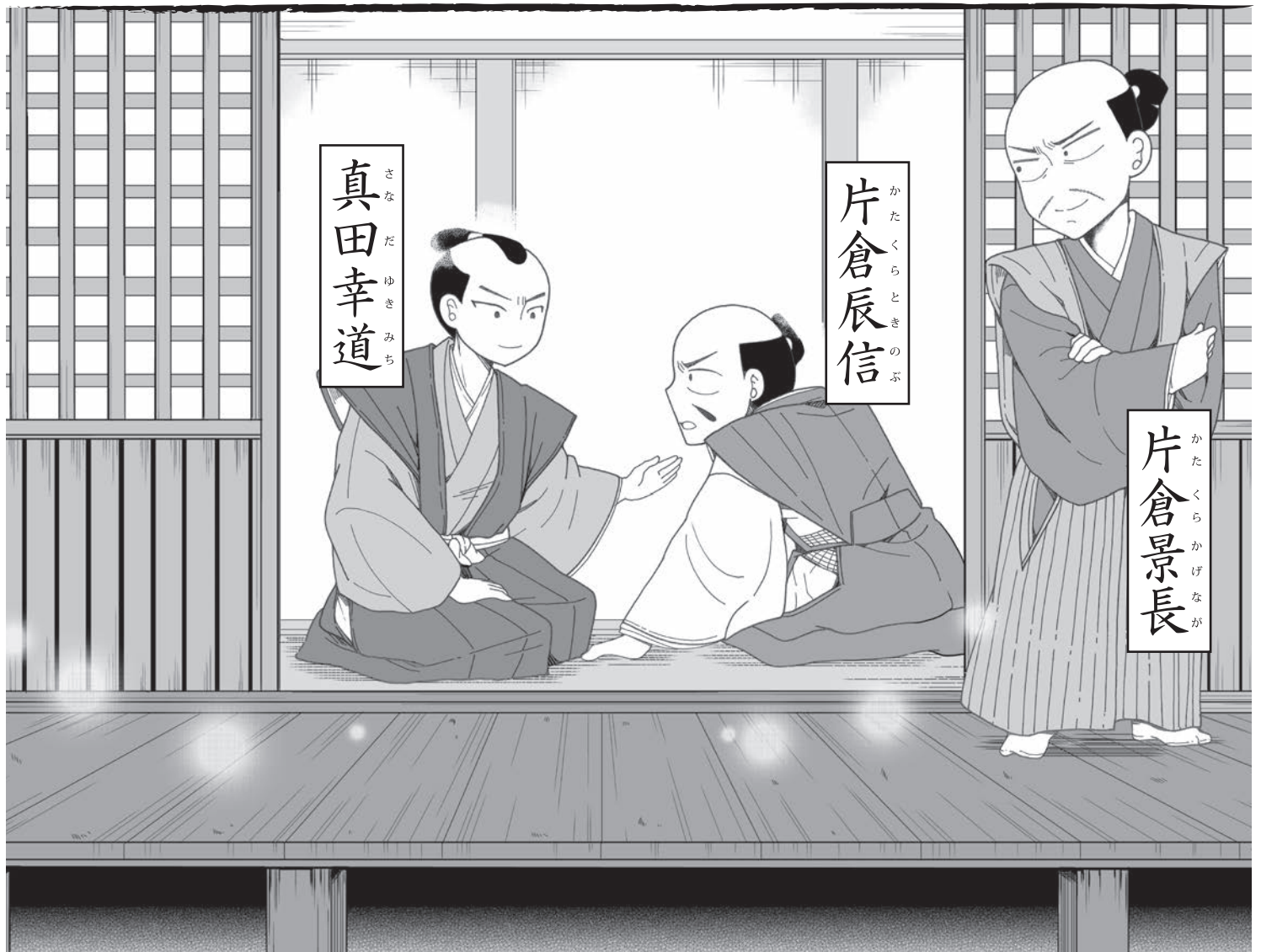
父の菩提を弔う

晴れて武士となり、一度は『真田』の姓を名乗ることもできた守信。しかし、幸村との関係を明かすことは絶対禁止！でした。父の冥福を祈ることもできない守信は、さぞや悲しかったことでしょう。

そんな守信の分まで幸村の菩提を弔ったのは、白石に暮らした二人の姉でした。

片倉重綱の後妻となった阿梅は、白石の森合に月心院というお堂を建てて、そこに父幸村の位牌をまつりました。また、阿梅の菩提寺と定められていた当信寺にも、幸村の位牌をまつらせました。

また、天下が落ち着いた後白石に呼び寄せられ、片倉定広の妻となった幸村の姫阿菖蒲は、田村家代々の墓所（田村家は定広がもと名乗っていた姓。政宗の妻・愛姫の実家にあたる家柄）の一角に、幸村の遺髪を埋葬した墓を建てて父の冥福を祈りました。



真田幸道

片倉辰信

片倉景長

## 其の十五

### 再会、兄弟の血脈

仙台真田氏の礎を築いた守信。しかし、再び『真田』の姓を名乗れないまま亡くなり、息子の辰信が後を継ぎました。

延宝元年（1673）のある日、江戸の伊達屋敷に勤めていた辰信に片倉景長が告げました。「今度、この屋敷で宴が催される。客は松代藩主・真田幸道さまじゃ。お前とは浅からぬ縁のお方ゆえ特別に引き合わせる。」

松代の真田家は関ヶ原の合戦で別れた兄・信幸の家筋。対面できるなど想像もしていませんでした。いよいよ宴の日。伊達屋敷を訪れた真田幸道は、涙ながらに辰信と対面しました。

「辰信殿。そなたの家の話は信幸のおじい様より聞かされておった。大坂以来さぞ大変であつたらうに、よくぞ幸村公の血脈を伝えてくれた。そなたの血は真田一門の宝ぞ！」

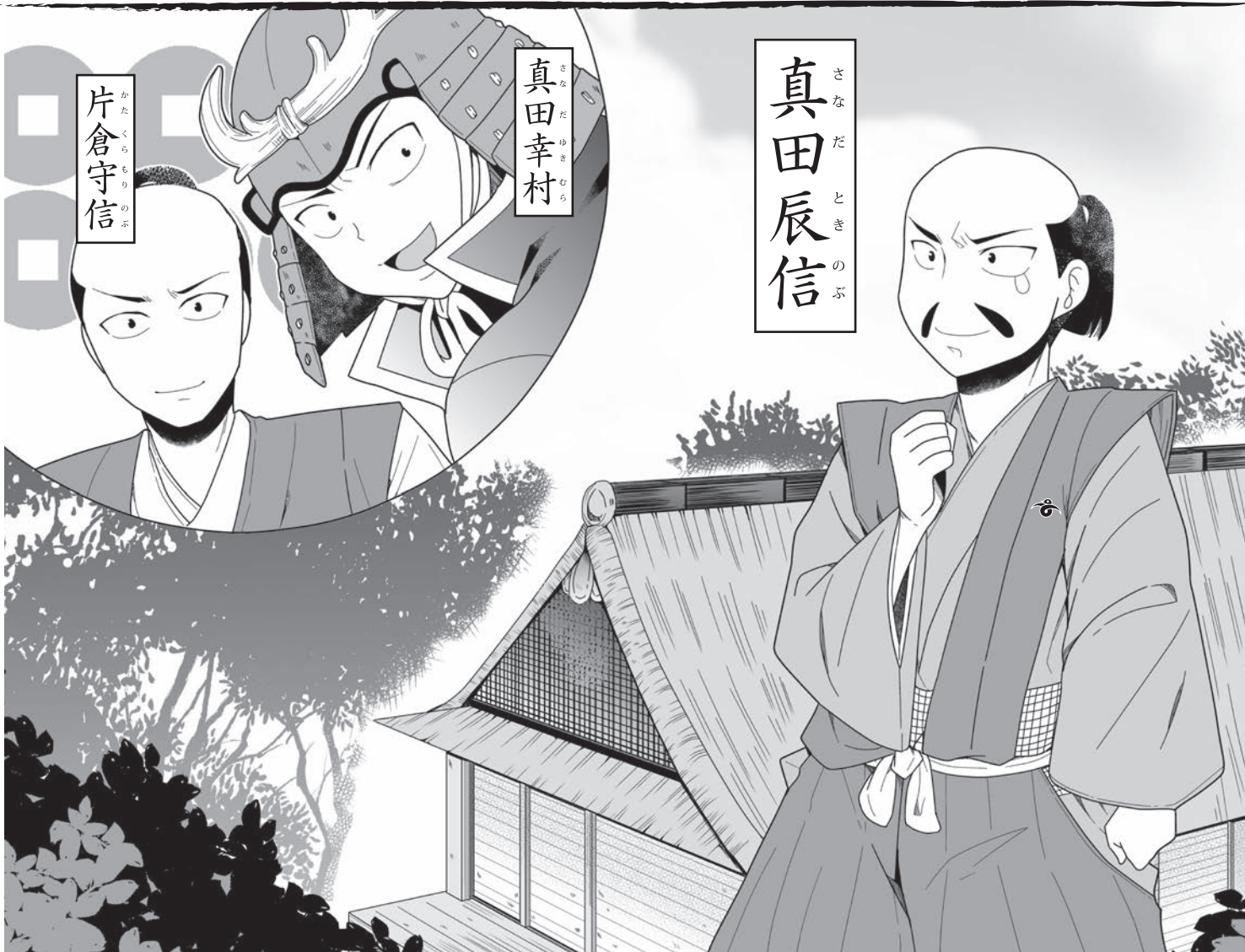
幸村と信幸。遠い昔に離ればなれになった兄弟の血脈が、再びまみえることができた瞬間でした。

※伊達屋敷での出会いは史実ですが、その経緯や対面の様子については物語上の演出を行なっています。

真田辰信

真田幸村

片倉守信



## 其の十六

真田復姓なる！

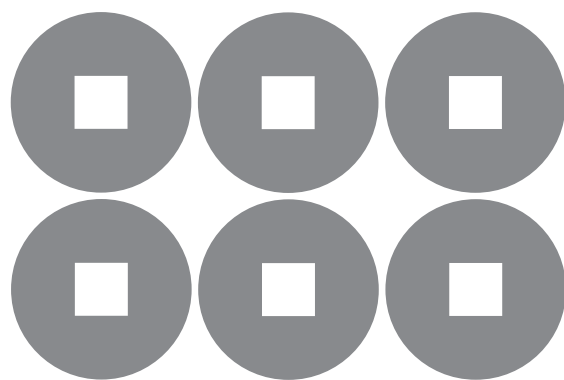
辰信には、生涯かけて叶えなければならぬ事がありました。それは、再び『真田』を名乗ること。

父守信が徳川家から疑われて『片倉』と改めてから72年が過ぎた正徳2年（1712）、藩の「もはや真田を名乗るのに不都合なし」という判断によって、晴れて『真田』を名乗ることができたのです。辰信57歳の時でした。

幸村が亡くなってから97年もの歳月を経て、やっと『真田』復活がかなったのです！

今でも、私たちの郷土には、幸村の子どもたちや、守信の子孫たちにもつわるお寺やお墓、記念碑や古文書などがたくさん伝えられています。

江戸時代以来四百年という長い時の流れの中、徳川家の追求をかわすため、一度は途絶えたことにされた幸村の血脈。しかしそれは、秘かに私たちの郷土に根付き、育まれて今日に至るのです！



# 仙台真田物語

SENDAI  
SANADA

制作・発行：蔵王町教育委員会

2013年4月21日 初版発行

2014年5月20日 改訂版発行